



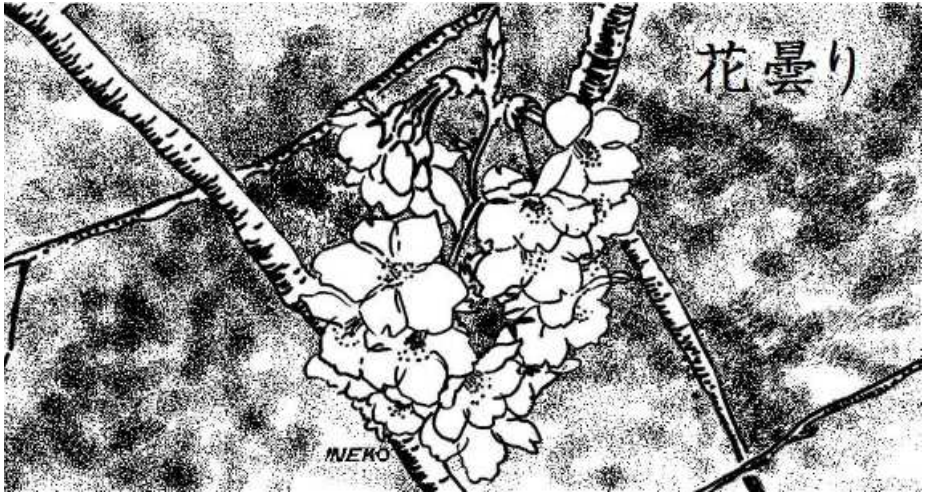
2009年4月15日発行（隔月刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2009年4月  
第73号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久



## 目 次

漢点字の散歩（12）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（69）（山内 薫）	7
一言（岡田健嗣）	9
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	12
東京漢点字学習会報告（菅野良之）	16
見果てぬ夢を（15）（山本優子）	19
漢文のページ	21
漢点字講習用テキスト（初級編・第14回）	24
ご報告とご案内	25
編集後記（木下和久）	27

# 漢点字の散歩 (十二)

岡田 健嗣

## 五 点 字



本稿では、へ点字くをご存じない皆様も、点字をパターンとしてお受け止めいただければ充分です。点字で何が書かれているかを読み取る必要はありません。

### ① 英語点字(三)

#### まとめー拡張アルファベットと一マス略字

前回・前々回と、英語点字について考えて来た。触読上の読み易さを追求して、ブライユ以来の点字を、各国語に適するよう改変(進化)させて来た推移の一部に、英語点字の略字を通して垣間見ることができればと思うからである。今回その全容をご紹介できるはずであるが、その前に、前回の留意点をまとめておきたい。

① 単語を表す一マス略字・音素を表す拡張アルファベット(前号参照)三三文字のうち二九文字が、一文字

で一つの単語を表す略字として用いられる。一文字で一語を表すために文中では、その前後にスペースを入れなければならぬこと、他の文字や単語とは結合できないことという制約があつて、名詞の複数形、動詞の語尾変化、あるいは複合語の形成には用いることができない。

例 d(do)→does do:(doing) don't

e(every)→eybody(everybody) (e:後述)

g(go)→goes go:(going)

h(have)→hav:(having)

k(knowledge)→kl:g:(knowledge)

kl:g:(knowledge) kl:g:

(knowledge) (k'後述)

l(like)→lik:(liked) likes lik:(liking)

w(will)→will:(willed) will:(willing)

wills will:s(willness) (s:後述)

(child)→childhood(childhood) child:s

(childness)

(which)→i:e:(whichever)

(out)→t(without) t:(throughout)

(still)→i:illife(stillife) ill:s

(stillness)

## ルイ・ブライユの点字表

1 :	1 Aa	2 Bb	3 Cc	4 Dd	5 Ee	6 Ff	7 Gg	8 Hh	9 Ii	10 Jj	Upper4
2 :	11 Kk	12 Ll	13 Mm	14 Nn	15 Oo	16 Pp	17 Qq	18 Rr	19 Ss	20 Tt	+ 23
3 :	21 Uu	22 Vv	23 Xx	24 Yy	25 Zz	and	for	of	the	with	+ 23
4 :	31 ch	32 gh	33 sh	34 th	35 wh	ed	er	ou	ow	Ww	+ 23
5 :	41 ,	42 ;	43 :	44 .	45 en	!	()	?	in	”	Lower4
6 :	51 st	52 ing	53 ble	54 ar	55 ,	56 -					
7 :	57	58	59	60	61	62	63				

②一マス音節略字…一つの略字で、子音と母音で形成される音節を表す。この中には、単語の略字として用いられるものも多い。

③Lower 4 dots sign : 41～50番は、“Lower 4 dots sign”と呼ばれて、マスの上四つの点の組み合わせでできている1～10番の符号を、下の四つの点の位置に下げて表した符号である。これらは55・56番とともに、punctuationや文章記号を表すのに用いられる。また略字としても用いられる。(前号参照)。

### 二マス音節略字

二マス略字とは、二つのマスを使って表す略字である。英語点字では、“right side dots”である58～63番の符号を、文字に前置して表す。57番「」はアクセント符号であるので、ここでは使用されない。58「」、59「」、60「」を文字に前置すること、単語あるいは音節を表す二マス

略字を作るのである。また61「**イ**」はイタリック符号、62「**ビ**」は字母符号、63「**大**」は大文字符号であるので、これらが前置されて略字を表す場合は、語尾および語中の音節略字に限られるのである。

例：

cannot

holiday yesterday

bound found

everyday forever

wherever

chance performance

defence defence offence

father grandfather

song pingpong

here herewith

had hadn't hadn't

know knows unknown

acknowledge

lord overlord

beautiful careful

mother grandmother

many Germany

name renamed naming

vision expression

contraction emotion

tion

nation station

formation

one everyone money

stone

department picture

articular

question questionable

right bright sport

something sometimes

less endless unless

holiness kindness

spiritual

time times maritime

timing

count count mountain

comment moment

treatment

understand thunder



u(upon) → u(thereupon)  
 w(work) → w(working) wop(workshop)  
 w(word) → w(s wordless)  
 w(world) → u(w underworld) wip(world-ship)  
 y(young) → yman (youngman) ywoman (young-woman)  
 y(ity) → abil(y ability) cy(city)  
 y(ally) → n(n y nationally) re(y really)  
 usu(y usually)  
 (there) → e(therefore) (therein)  
 (these)  
 (their) → s(theirs)  
 (character) → i(ic characteristic)  
 (through) → t(throughout)  
 (those)  
 (where) → any( anywhere) no( nowhere)  
 (whose)  
 (ought) → b( bought) (thought)

以上が、ニマス略字の全てである。これをまとめる  
と以下のようになる。

- ①このニマス略字の構成は、一マス音節略字に従っ

ている。58〜60番の「and for of the world」の符号が前置されたニマス略字は「and for of the world」の「and for of the world」のニマス略字と同様に、単語として機能し、語の構成要素となり、あるいは複合語を組成する。61〜63番の「ing ble」が前置されたニマス略字は「ing ble」のニマス略字と同様に、語尾および語中の音節を表す。

②このニマス略字の右側のマスには、拡張アルファベットの文字が入る。その中で用いられていない文字は、「a b i j v x z gh sh st」である。拡張アルファベット以外では唯一「the」が用いられる。このように英語点字の基層は、この拡張アルファベットが占めている。

③58〜63番の right side dots を前置してニマスの点字を作る試みは、ブライユの起案にはなかった。ブライユは縦三点・横二列「」のニマスを単位とした点字を考案したがその前に、「」という四つの点のパターンがある。点字は六つの点ではなく、先ず四つの点から始まったというのが、恐らく真相であろう。英語点字のニマス略字は、点字の概念をもう一步進めたものになっている。四つの点で始まったブライユの

点字、それがブライユ自身の手で六つの点の文字へ歩を進めた。その後各国語に伝播する中で、英語点字では、right side dotsを前置した、その前のマスとは一点分の幅を置いて、縦三点・横三列のパターンが、点字の単位となつて行つたのである。これは試行錯誤と経験則のなせる業であつて、弛まぬ研究の成果に違ひなく、極めて大きな意味である。

人の眼球は常に細かく振動しているという。網膜の視細胞の閾値を低く留めるためであると言ひ、また像を認識するためには、その周辺との差異を認知する必要があるからとも言われる。点字の触読も、指先を常に動かすところにコツがある。疲労しないように大きな動きは避けなければならぬが、指の動きの中から文字が生まれて来ると言つてもよい。そんな経験から二マスを単位とした点字が、自ずと認識されて来たのであらう。

### 縮字 (short-form word)

最後に紹介するのが、“short-form word”(縮字)である。これは、単語の綴りの中から数文字を抜き出して、綴りそのものを短くするものである。

“Ltd., inc.”のように、墨字でも慣用的に用いられ

ている方法であるが、それを体系付けて、単語の綴りを短くし、文章の文字数を少なくするものである。この略字は数多いので、代表的な単語を挙げることにする。

例：

ab=about abv=above ac=according  
acr=across af=after afn=afternoon  
ag=again agt=against al=also  
alr=already  
bc=because bf=before bs=beside  
bl=blind brl=braille  
cn=children cv=conceive cvg=conceiving  
cd=could  
dcl=declare dclg=declaring f=first  
fr=friend gd=good grt=great  
imm=immediate xs=its lr=letter ll=little  
nec=necessary pd=paid qk=quick  
rcv=receive rcvg=receiving  
sd=said sd=should s=such td=today  
tgr=together tm=tomorrow wd=would  
yr=your

以上は縮字を網羅したものではないが、おおよその特徴を示すには充分と思える。

①この縮字を使用するには、墨字文の略字に後置される省略符号の「・」は、使用されない。

②縮字の“xs(its), yr(your)”は、“x(it), y(you)”にsやrをプラスしたものではなく、“xs, yr”という二マスの縮字である。

③縮字は、単独の単語として機能するばかりでなく、語頭や語尾に文字が付加されたり、他の語と複合したりできる。

例：

⋮s(beside) → ⋮ss(besides)

bl(blind) → bl⋮s(blindness)

imm(Immediate) → immly(Immediately)

lr(letter) → lrpress(letterpress)

④語尾にeのある動詞には、注意が必要である。“⋮c(v(conceive), rcv(receive))”の過去形・過去分詞形ではdを後置する「 $\cdot d$ 」で表されるが、現在分詞形では、eを取ってingを付ける必要がある。そのために、“⋮cvg(conceiving), rcvg(receiving)”という縮字が用意されている。

⑤やむにやむ終わる語に「 $\cdot dcl$ 」(decl(declare))”

の現在分詞形は“ $\cdot dclg$ (declaring)”であるが、名詞形である“ $\cdot dcln$ (declaration)”は、eを除くために縮字を使用できない。“ $\cdot dcl⋮n$ ”と表記する。同様に“ $\cdot brl$ (braille)”も名詞の複数形を表すにはsを、動詞として使用する場合の過去形・過去分詞形には $\cdot d$ を後置することで表されるが、現在分詞形を表す場合は、縮字を使用できない。“ $\cdot brll⋮g$ ”と表記する。

以上である。ここに紹介した略字の使用には、微細に渡る規則が適用される。その詳細は、“American Printing House for the Blind”版、“ENGLISH BRAILLE”を参照せよ。

英語点字はこのようにして、文字の捉え方を一歩も二歩も進めている。これ以上進化すれば、一般の文字との間に、隔たりを見ることになる。専門分野の表記法や“ $\cdot steno$ (stenography)”(速記法)も考案され、使用されているが、一般の点字の文書は、この略字法によって表されている。フルスペリングの文書との分量の比較では、約三〇パーセント縮小できるという。欧米の言語は、書き言葉であっても、発音と意味とが直結している。文字は音を表すだけで、意味は指示しない。そのため点字にも、発音の速度とリズムに適用することが求められたのであろう。(続く)

## 点字から識字までの距離（六九）

### 新常用漢字表（一）



山内 薫（墨田区立あずま図書館）

文化審議会国語分科会は今年の一月二十七日、同漢字小委員会がまとめた、今までの常用漢字表に代わる新常用漢字表（仮称）の試案を了承した。平成二一年三月一六日から四月一六日までの期間、文化庁では、この「新常用漢字表（仮称）」に関する試案」に対する意見募集を実施している。そして来年二〇一〇年の二月に文部科学大臣宛に答申することとなっている。今回、追加される漢字は一九一字、今まで常用漢字表にあって今回削除される漢字が五字（「銑」「錘」「勺」「刃」「脹」）で、合計二一三一字が候補として上がっている。

今回の見直しは、パソコンや携帯電話などの情報機器の普及が私たちの漢字使用に大きな影響を与えており、新たな漢字使用の目安が必要であるという基本的な考え方に基づいている。情報機器は「読む行為」よりも「書く行為」を支援する役割が大きく、この書記

環境の変化に対応して①読める、②分かる、③書けるという三つの要素で漢字を考え、読めるだけでよい「準常用漢字」という考えも検討されたが、最終的には「なるべく単純明快な漢字表を作成する」という考えを優先し、表は一つでいくことになった。今回の追加漢字の中には「鬱」といった難字や「籠」「麓」など筆画数が多い字も入っている。今回の改訂に当たっては、「漢字出現頻度数調査」が、書籍、教科書、新聞、ウェブサイトなどで行われ、「現在使用されている常用漢字のうち二五〇〇位以内のものは残す方向」で、「表外漢字で一五〇〇位以内のもの（藤・之・誰・伊・俺など）」と常用漢字二五〇一位以上のものは基本的に残すが不要なものは落とす方向」で、「表外漢字の二五〇一位から三五〇〇位までの漢字は特に必要な漢字だけを拾う」という方針で一字一字が検討された。出現頻度が高い漢字でも、「訓のみあるいは訓中心に使用されているもの（濡・覗など）や人名・地名の固有名詞中心に使われているもの（伊・鴨など）」は入れないと判断された。また、今まで外されていた固有名詞の内、都道府県名（「阪」「奈」「岡」「阜」「栃」「茨」「埼」「梨」「媛」「鹿」「熊」）とそれに準じる字（畿・韓など）が例外として追加され



た。例えば今回削除された「銚」は書籍データの中で常用漢字中最も出現順位が低く、四〇〇四位だった。

また、今回常用漢字の音訓の見直しと追加も行われ、常用漢字の四〇八七（音二一八七、訓一九〇〇）

から、新常用漢字では四三八五（音二三五二、訓二〇三三）に増える。例えば「私」という漢字には「わたし」という、「魚」には「うお」という訓しかなかったが、今回「わたし」や「さかな」も追加された。

その他、追加された主な訓は「育（はぐく）む」「応（こた）える」「関（かか）わる」「旬（しゅん）」「要（かなめ）」など<sup>32</sup>例。削除される訓は漱石の

「猫」に登場する「疲（つか）らす」など。音では「世界中」とか「町中」と言う時の「中」の音「ジュウ」、「十」も今まで「ジュウ」と「ジツ」だけで、「ジュツ」はなかったが、今回追加されたために、千十二支も「ジツカンジュウニシ」だけではなく「ジュツカンジュウニシ」とも読めるようになる。

三月二十六日、国語施策懇談会が開かれ「新常用漢字表（仮称）」に関する試案について文化審議会の学者らが内容の説明を行った。（二〇〇九年三月三一日朝日新聞朝刊）そこで、集中した質問は字体の問題で、特に今回追加される漢字「遜」「遡」「謎」に使用さ

れる「しんにゅう」が、従来の常用漢字で使われていた「道」などの「しんにゅう」と異なる「二点しんにゅう」であり、なぜ統一できないのかということだった。

今回の追加文字の字体については「最も頻度高く使用されている字体を採用する。」という方針であり、漢字出現頻度数調査の出現回数で、例えば「頰」八回対「𩺰」六六八五回、「龜」六六九五回対「龜」四回、一点しんにゅうの「遡」二回対二点しんにゅうの「遡」七五三回、新字体の「餌」三回対、旧字体の「餌」一三七七回というように広く用いられている文字を採用したために一点と二点しんにゅうが漢字表の中に混在することになってしまった。しかし食偏の常用漢字にはない「餅」という字が新聞でどのように使用されているかを見るとまったくバラバラだという。あるブログに以下のような記事が載っていた。

(<http://www.ytv.co.jp/announce/kotoba/back/3101-3200/3131.html>)

「二月六日、赤福餅の販売再開の記事で『もち』の漢字の表記が、新聞各紙夕刊でバラバラでした。と言っても、よく注意しないと気付かないで通り過ぎそうなものなのですが。」

(毎日新聞) 「餅」 (ルビなし)

(読売新聞) 「餅」 (ルビあり)

(朝日新聞) 旧字体の「餅」 (ルビなし)

(産経新聞) 旧字体の「餅」 (ルビあり)

(日経新聞) 記事なし

という具合でした。ここからわかることは、

(一) 「餅」は常用漢字表に載っていない「表外字」である。

(二) 毎日と読売は、簡略字体(新字体)の「餅」を用い、朝日と産経は「正字体」(旧字体)の「餅」を用いている。

(三) 旧字体・新字体を問わず、読売と産経は「餅」「餅」は、ルビを振らないと使えない、つまり「表外字」としての扱いをしているが、朝日と毎日、表外字ではあるがそれぞれの新聞社独自に「ルビがなくても読める漢字」として扱っている。

という点ですかね。  
つまり、「新字体・旧字体」「ルビあり・ルビなし」という二つの基準が、一つの漢字に対して当てはめられているので、これだけばらばらの表記なのでしょうね。」

このことから新聞社でも、常用漢字表の表外漢字について、それぞれ独自の扱いをしていることが分かる。

## 一言

岡田健嗣



前号では、昨年(2008年)11月末に起きた、上方落語の落語家・笑福亭伯鶴さんが、駅のホームと電車との間に挟まれて重傷を負ったことを考えて見た。伯鶴さんの怪我は脳挫傷と両足の骨折だった。全国の視覚障害者と支持して下さっている社会に、大きな衝撃を与えた。幸い伯鶴さんの回復は速く、現在はリハビリテーションの段階に入っているという。高座への復帰を待つ声も高い。

私は2005年に、身体障害者自立支援法に基づく、障害者の外出支援を事業とする会社を起した。

現在でも全国的には、サービス内容の地域差があるようだが、自立支援法以前は国の基準がなく、各地域が独自の基準を設けて、事業所に委嘱するなり、事業所を設置するなり、ボランティア活動に委ねるなりして、外出を支援していた。

現在の自立支援法が万全とはとても言えないが、全国に一律の基準を示したのは、一つの評価に値すると私は考える。というのは、それまでの各地域での活動が、障害者の外出のニーズに応える形で進められたのが、それがさらなるニーズを掘り起こすことになっ

て、地域間の格差が広がったことと、ニーズの内容が切実でも放っては置けないものでありながら、社会のあり方が、狭い地域の相互扶助では支えきれなくなってきたことなど、社会が考えなければならぬところが、ますます大きくなっているように見えるからである。

私が外出支援のサービスを受けるようになったのは、さほど前ではない。現在公的な外出支援として受けているサービスは、十数年前までは、役所・通院・金融機関・買い物と、だいたい母に同行してもらっていた。まだ母の足が、しっかりしていたからである。

その他の用件は、一人で出かけて行くか、一緒に歩いていただけの方があれば、その方をお願いするかであった。社会に出たころは、一人で行動するのが当然と考えていたし、その責任は、自由の別名とさえ考えていたのである。

母の同行に頼っていたというのも、実は多くは、行動ではなく、行った先の用件によってであった。病院では誰かの手を煩わさなければ、診察も処置も受けられない。役所や金融機関では手続きの大半が書類の解読と記入である。買い物は、品物の見分けである。つまり視力なしでは果たせない用件なのである。そこで一人で行っても何とかできると判断できれば、母に同行を頼まずに、一人で出かけた。

よく視覚障害者の一人歩きは、頭の中に地図を書く

ことから始まるという。確かにそれは間違いではないようだが、その前に、実際に動いた道順を、頭の中に地図として描けるかが大事な要件に思える。自分の身体の動きをなぞって見る。聴覚や触覚からの情報から、どう動いて来たかを再認して見る。知っている道を、身体の動きとして頭に浮かぶようになれば、人から聞いた情報から、地図が描けるようになったと言ってよいようだ。そして人から得た情報を頭の中になぞって見て、その通りに身体が動けば、目的地へちゃんと到達できるのである。

私の20代・30代は、だいたいうまく行った。だが前号でも述べたように、いつもうまく行く訳ではなかった。ホームから落ちたり、電柱にぶつかったり、止まっているトラックの荷台の後ろに顔をぶつけて歯を折ったりもした。

話のもとへ戻る。

私が障害者の外出支援に手を染めるについては、右のようなことが、徐々に困難になって来たという現実がある。私自身の能力の減退と、母の高齢化である。しかし外出へのニーズは、ますます大きくなる。

現在行われている公的支援としての外出サービスは、私が母の厄介になっていた範囲を超えない。せいぜいリクリエーションがプラスされる程度である。自立支援と言いながら、職業に関わる外出、通学、営利目的の外出には利用できない。伯鶴さんの事故を考え

ると、この辺りが最も大きな要点のように思える。

鉄道を安全に乗降するために、以前より障害者が利用しているサービスがある。それは駅の職員の手を借りて安全をはかるといふものである。車椅子使用者の方々が、駅員の手を借りている様子は、案外よく見かける。が視覚障害者はどうだろうか？私自身は、駅員から声をかけられてお世話になったことは何度かあるが、積極的にお願いした経験はない。

そこで鉄道会社の教社に、どのような対応をしているか尋ねてみた。

尋ねたのは、JR、東急電鉄、京浜急行電鉄、横浜市営地下鉄、京成電鉄、東京メトロの六社である。京急と京成は、私が日常的に利用している電車である。

ここで際だって相違を見せたのが、JRと他の鉄道会社の対応である。JR以外の会社では、「最寄りの駅で声をかけていただければ、ホームでの乗降や乗り換えなどの誘導を行います。予め利用の駅に電話連絡していただければ、お待たせの時間も短くなります。」という答えであった。案内に電話をすれば、利用駅の電話番号も教えてもらえるとのことだ。

JRではどうか？

JRに電話をしようと電話番号を調べようとして、先ず驚いた。104番に問い合わせると、各駅の電話番号は登録されておらず、案内だけがあるとのことだっ

た。その案内に電話をしても、先方が出るまでに、長いこと待たされた。

用件を述べると、「1日以上前に、この案内に電話をして欲しい。そこで乗降・乗り換えの駅とその時間を申し込んで欲しい。」と答えられた。これは全国どこからでも同じだという。JRでは、乗りたい駅、乗りたい電車、乗り換えあるいは降りたい駅を事前に決めてから申し込むようにというのである。

JR以外は地域の鉄道で、日常的な足として乗降している。JRは、新幹線をはじめ遠距離を運行していて、山手線、京浜東北線など、日常の足として乗降する電車も運行している。がどうやら駅員の手を借りるには、遠距離運行を利用するのと同じ考えで乗降しなければならぬようだ。

このようなサービスを、より身近に利用するには、どうすればよいか、私も考えて見たい。

案内の電話番号：

JR 050-2016-1600、1602

東急電鉄 03-3477-0109

京急電鉄 03-5789-8686

横浜市営地下鉄 045-664-2525

京成電鉄 03-3831-0131

東京メトロ 03-3941-2004

## 「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくしごと

木村 多恵子



第39回例会 2009年2月18日(水) 13:30 ~ 15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

機関誌「羽化」第72号を配布した。

「東京漢点字羽化の会」を発足するため、3年半前に、毎日新聞他、読売新聞、東京新聞に、パソコン入力による漢点字点訳をしていたくボランテイアを求めて、各新聞社に募集要項を掲載していただいた。各社の担当者、「漢点字」について説明をしたおりに、毎日新聞の記者、有田浩子さんが、もう少し詳しく話を聞きたいと言って、岡田代表とわたしを取材しに来てくださった。結果として、よい記事を掲載してくださった毎日新聞の記事を読まれた方が一番多く集まってくださった。そして、4回の「パソコンによる漢点字入力講座」を終えて、「東京漢点字羽化の会」がはじまったのである。わたしたちの読みたい本を入手していただきはじめ、さらに漢点字を、視覚障害者に普及するために「学習会」を2007年4月から始めた。

当然、それまでの経過は有田記者に報告したが、今回、横浜で「常用字解」の漢点字訳が完成し、「常用字解」の小型版のような、小、中学生向けに、白川静監修、山本史也著の、「神さまがくれた漢字たち」を東京羽化で漢点訳して下さったので、これも併せて、有田記者に報告したので、再度取材を始められた。有田さんの時間の都合で、2月21日の「学習会」から来られ、後1度は、次の例会に見えるかもしれない。何よりも、岡田代表から、「常用字解」の詳しい話を聴きとっていただきたいと思っている。

今日の例会では、まずそんな話をし、次に皆さんが入力して下さったテキストファイルを、実際に、EIBRKWに変換して、点字用にレイアウトを整えたり、部分的に文字入力や削除などの編集方法を、岡田さんに解説していただいた。

4月24日金曜日、横浜国立大学の、村田忠禧先生からご紹介の「社団法人国際善隣協会」で、岡田さんが漢点字について講演することになった。新橋1・5・5にそのビルがある。今回は東京羽化の皆様にご協力をお願いし、馬越さんと中田さんがお手伝いくださることになった。もし許されるなら、わたしも参加したい。

学習会もレーズライターで漢字を大きく書いていただいているので、字式の説明を聞きながら、少しずつ

文字の構成が分かってきて興味が増している。

第40回例会 2009年3月11日(水) 13:30  
15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

毎日新聞の有田記者が、2月の学習会取材に引き続いて、例会活動にも取材に見えた。学習会は、たとえば「合」という文字を、レーズライターに書いていた。書いたものをベースにして、「合」の形を確認し、この文字の成り立ちの説明を受け、熟語としてどう使うか、具体的にテキストに書いてあるものを読み、もつと他には無いかと、みんなで熟語を探した。更にこの「合」の字を組み込んだ文字、「糸偏に合」で「給」。「手偏に合」の「拾」。「竹冠に合」で「答」があり、それぞれの漢字の形と成り立ちと熟語を習っていった。従って、もともと漢字を知っている人なら、漢点字の部分は分からなくても、学習の進め方は理解しやすいであろう。

学習会後に、受講者に「漢点字を学習することにした動機、実際に学習しての感想などを聞き取った。

それに対して、例会の内容は、4月24日の「善隣協会」での、岡田さんの講演内容の一部の、漢点字と漢字がどう結びついているか、マグネットを使って、当黑板报してくださる方との打ち合わせを兼ねての、字式の説明をしたり、「大博覧会」のEIBRKWを使

つての校正や実際の入力方法などは、初めて見る方には、いささか分かりづらいと思う。それに、漢点字の必要性がまだ充分理解いただいていないようにも思われる。記者も、もう少し「漢点字を使う人をどうして増やしたいのか知りたい」とおっしゃっていた。木村からも話を聞きたいとおっしゃるので、4月6日にお会いすることにした。

なお講演会の前に、善隣協会の方と村田先生、漢点字協会の会長・川上リツエさん、横浜漢点字羽化の会の木下さん、岡田さん、田中さん、木村と、その、ガイドヘルパーの3名の方と、12時から会食をすることになった。東京羽化の会の皆様にもご参加いただければよいと思う。

4月の例会から、新しいことを始める。奥平卓著、「漢文の読み方」(岩波新書ジュニア147)をテキストとして、訓点の付け方と読み方、入力方法などを、例会の場で、同じ所をみんなで入力することに。4月の例会のときにコピーを配布する。

また4月の例会では、「銀文字聖書の謎」に出てくる新たな記号について、それぞれ不明な記号を書き出して、統一する。そのために原本を持ち寄ることにする。

\* 予告

4月の例会(第41回) 2009年4月8日(水)  
13:30 ~ 15:30、7階第1会議室

第25回学習会、2009年4月18日(土)、18:30  
〜20:30、港区ヒューマンプラザ7階第1会議室

5月の例会(第42回)、2009年5月13日  
(水)、7階竹芝小ホール

第26回学習会、2009年5月23日(土)、18:30  
〜20:30、7階第1会議室

## わたくしごと

「東京漢点字羽化の会」の皆様は「銀文字聖書の謎」(小塩節 新潮社)を入力していただいた。この本を読んでいると、当然ではあるが、感動させられることが多い。

まず、何故この本をお願いしたかについてである。4世紀後半に、ドナウ河畔の小さな村に住む、ウルフイラという男が、たった一人で、数十年かけてギリシヤ語の旧・新約聖書を、自分の国の言葉であるゴート語に訳出した(列王記上・下を除く)。

それが6世紀には北イタリアのラヴェンナに運ばれ、テオドリクス大王の命令で、大々的に書写作業が行なわれた。何部か書写されたゴート語の聖書の写本は、テオドリクス大王の命で、当時はまだゴート人以外には文字を持たないゲルマン諸族に贈った。それは、染めてない羊皮紙に、普通の黒色の炭で書かれていたが、分厚い皮の表紙に宝石などを埋め込んだ豪華

な装丁の聖書である。

そのうえ、テオドリクス大王は、自分自身のために王位を表す朱色に染めた羊皮紙に金・銀泥で文字を記した聖書の一部だけつくらせた。新約聖書前半の四福音書のみ美しい特製本で、これが「銀文字聖書」である。

ゲルマン諸族に贈られたものは、長く度重なる戦乱の中で、ことごとくといっていいほど失われてしまった。しかし、この「銀文字聖書」だけが散逸しながらも、戦乱の中をどうぐり抜けてきたか、数奇な運命をたどりながら、1500年を経て、今スウェーデンの国宝になって、ウプサラ大学の、カロリーナ図書館に納められている。ウプサラ大学に納められているのは、元の336枚の、その半分強の187枚である。1970年にドイツのシュバイヤー大聖堂から最終ページが発見されている。従ってまだどこかの修道院から大聖堂から、一枚、また一枚と発見されるかもしれない。

わたしが感動したのは残されたものからでも、古いゴート語の語彙や文法をほぼ完全に復元でき、訳出の方法まで知ることができるという。しかも、ゲルマン諸国は、6世紀以降、何百年かをかけて、ローマ・カトリックのキリスト教を取り入れてヨーロッパを形成してゆくのだが、信仰に関する基本的な言葉の多く

を、ゴート語の聖書から決定的な影響を受けていることが明らかになりつつあるということである。

ウルフィラは、「ゼウス」のことを「グズ」（ゴツド）という言葉を見出す。

「神（グズ）は、初めに天地を創造した」（旧約聖書・創世記冒頭）

この「グズ」という語はゴート語では、「相談相手」という意味だという。呼びかけ、話しかけ、何事をも語り合える相手なのである。どちらか一方的なものでなく、双方向に話し合えるということである。

また、「読む」と「朗読する」はウルフィラのゴート語では同じ一語で、「siguan」（スイングワン）で、ある。この言葉はやがて現代英語の“sing”（スイング）、ドイツ語の“singen”（歌う）になった。何を読み歌うか。それは聖書を朗唱することである。

聖書のことをゴート語では“boka”（ボカ）とい、文字、書き物や書物などをさす言葉である。英語“book”（ブック）やドイツ語の“Buch”（ブーフ、本）と同じ根っ子から来ている語で、ドイツ語の場合、もとはブナの木をさす。

西暦前2世紀の頃、アルプスを越えて、北イタリアに入った一部のゲルマン人がエトルリアの人々から、ルーネ文字を教えられ、北方に持ち帰って道しるべや呪文用に、その文字をブナの木の花や棒に記した。

ブナは英語で“beech”、ドイツ語では“Buche”と今でもいう。ブナに刻んだものが文字であり、書である。

ブナの幹や枝に鋭い石や刃物の先でひっ搔くようにして文字を書く。ブナの木肌は、刻まれた傷をかなり長いあいだそのままにしておく性質があり、森の奥に至る小径のブナの幹にルーネ文字などで一種の道しるべを「搔き」記したらしい。

グリム兄弟はゴート語の研究者とは聴いていたが、このウルフィラのことに繋がると思わなかった。グリムやフェロー、アンデルセンなどの本を読むと、「ルーネ文字」の不思議な文字を見つける登場人物が出てくるが、これもグリムたちが勝手に造り出したものではないことも納得した。

ヨーロッパの歴史も全く分かっていないこと、読めば読むほど知らないことばかりである。

ゴート語訳聖書から、沢山の言葉が、現代の英語、ドイツ語、フランス、イタリアなどの言語の元になっていると説明されると、全く語学を知らないわたしは、ただうなずくしかない。

まだまだ全部読み切れていないし、理解のほども浅いので、これからゆつくり読んでゆきたい。

皆様ありがとうございます。

2009年4月6日



# 東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

## 平成20年度 第10回（第22回）報告

1 日時 平成21年1月17日（土）

18時35分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者（省略）

4 教材 「漢点字講習用テキスト 初級編

第二回（全十回）「点字編、墨字編

レーズライター…品、唱、単、單、和、合、給、

拾、答

5 学習会内容

（1）前回の復習 テキスト第二回、

3 複合文字（1）

「伝」、「転」 旧字の「傳」、「轉」からつくり

の部分は旧字の「專」を用いる。

「秋」 旧字の「穠」からつくりの部分は「火」

を用いる。亀は害虫を意味する。

「畑」、「炎」、「談」。

「点」 元は「點」で黒い煤が点々と付いた状態

を意味している。字式は占／列火

「然」 左上の月を斜めにした部分は肉づきで、

犬の肉を火であぶる様を意味している。中国では犬は神聖な動物で、神様への供え物として犬の肉を捧げた。字式は「月十犬」／列火

「燃」 高熱で燃え上がる様を表す文字。字式は火＋然

（2）今回の学習内容 テキスト第三回、

複合文字（1） 5・漢数字および第1基

本文字を部首とした文字（5）

テキストでは文字を構成している部分を「部首」で表現しているが、漢和辞典の部首分類の「部首」と混同するため、以後は「パーツ」で表現する。

\* 口 𠂔（1・2・4・5の点）をパーツとして含む文字。

77 「品 𠂔𠂔」 口 𠂔と三 𠂔𠂔（1・4の点）で表す。字式は口／口十口。口は祝詞を入れる器（サイ）を意味し、三つあるのはサイを多く並べるという意味。音読みのヒンは漢音、ホンは呉音。熟語に「新品」「商品」「製品」「気品」「上品」「部品」「作品」「景品」「手品」「品評」「品位」など。ホンの使われ方は「品位（ホニイ親王、内親王に与えられた位）」「九品仏（クホンブツ）」などがある。

78 「唱 𠂔𠂔」 口 𠂔と日 𠂔（2・3・6の点）で表す。字式は口十「日／日」。右側の「日」は明るいう意味で、星をさし、星が重なって瞬いている様

を表している。左側は口(くち)そのものである。音読みのシヨウは漢・呉音。訓読みの“うた”は他に“歌”“唄”“詩”の字がある。熟語に“提唱”“暗唱”“絶唱”“斉唱”“復唱”“愛唱”。

79 「単」旧字の“單”から口と口と口で表す。字式は、ツ／田・十で旧字は“口十口”／田・十。元は盾の形で、上部の口二つは模様を意味する。軍隊の最小単位ごとに固有の模様を持ち他と区別した。單が3つ集まると軍になる。音読みのタンは漢・呉音。單をパーツにもつ字に蟬、弾、戦、禅、箏などがある。熟語には“單身”“單元”“単数”“單刀直入”“単体”“単独”“単調”などがある。

80 「和」ノ木偏(2・3・4の点)と口で表す。字式はノ木偏十口。戦争からきた字で、ノ木は目印に立てる木、口はサイの意味で、争いごとをしないと神に誓いをたてることからきている。音読みのワは呉音、カは漢音、オは唐音。訓読みに“かず”がある。熟語に“温和”“柔和”“親和”“調和”“和服”“和歌”“和風”“和訳”。カの読みとして“和氏(カシ中国の楚の人で玉を鑑定した)”“和尙”と書いて、オシヨウは禅宗、浄土宗、カシヨウは天台宗の僧侶のこと。律宗は“和上(ワジョウ)”“と”いう。他の読み方に“日和(ひより)”“和泉(いずみ)”“三和土(たたき)”がある。

## 平成20年度 第11回(第23回) 報告

- 1 日時 平成21年2月21日(土) 18時30分〜20時40分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 (省略)
- 4 使用教材

「漢点字 講習用テキスト 初級編 第三回(全十回)」一点字編、墨字編

レーズライター・員、損、史、使、舌、活、舎、話

5 学習会内容  
(1) お知らせ…4/24(金)、(社)国際善隣協会で、岡田がお話をさせていただくことになりました。

(2) 前回の復習

\* 口(1・2・4・5の点)をパーツとして含む文字。“サイ”の意味が多い。

「品」お祈りの道具。三つあることから沢山捧げる意味を持つ。

「唱」右側の日は星を意味し、幾つもまたたいている状態を表している。

「単」漢点字は旧字の“單”より口を二つで表している。

「和」“ワ”は、日本の呼称にも使われる。

中国の古称では“倭(ワ)”が使われた。古代中国では東西南北に住する異民族に対し“東夷(トウイ; 東方のえびす。満州、朝鮮、日本など)”“西戎(セイ

ジュウ；チベット、トルコなど）  
“北狄（ホクテキ）；北方塞外のウイグル、蒙古など”  
“南蛮（ナンバン）；インドシナなど南海の諸国”  
“と呼んでいた。”

(3) 今回の学習内容（テキストは前回と同じ）  
・合<sup>⋮</sup>（1・2・5の点と2・3・5・6の点）  
をパーツとして含む文字。

81 「合<sup>⋮</sup>」 三角屋根（1・2・5の点）と口（2・3・5・6の点）で表す。間の横線は省略。サイにふたをした形を表す。字式は屋根／一／口。音読みのゴウは呉音、ガツは漢音。熟語に“化合”“鳥合”“配合”“混合”“都合”“結合”“集合”“結合”“照合”“合戦（カッセン）”“合点（ガッテン）”。他の読みとして“百合（ユリ）”がある。なお“会”は合から転じた文字。

82 「給<sup>⋮</sup>」 糸偏（1・2の点）と合<sup>⋮</sup>（2・3・5・6の点）で表す。字式は糸十合。音読みのキユウは漢音、コウは呉音。熟語に“配給”“月給”“日給”“昇給”“恩給”“給料”“給付”など。コウの読みは“賑給（シンゴウ）；平安時代、毎年5月、京中の窮民に米塩を支給する公事。奈良時代は高齢者身寄りのない者・困窮者などを対象に全国で行なわれたが、その後、京中に限られるようになった。”

83 「拾<sup>⋮</sup>」 手偏（1・2・3・4・5の点）と合（2・3・5・6の点）で表す。字式は手偏十合。音読みのシユウは漢音、ジュウは呉音で証文や公

文書等で十に替えて用いる。熟語には“收拾”“拾円”  
“命拾い”などがある。

84 「答<sup>⋮</sup>」 竹冠（1・2・3・5の点）と合（2・3・5・6の点）で表す。字式は竹／合。音読みのトウは漢音。熟語に“答弁”“答申”“答辞”“即答”“問答”“自問自答”“口答え”など。他に“答拜（タツバイ；丁寧なもてなし）”がある。草冠の“荅”はトウと読み、小粒の豆、あずきや緑豆などをいう。

・員<sup>⋮</sup>（員<sup>⋮</sup>3・5の点と口<sup>⋮</sup>1・2・4・5の点）をパーツとして含む文字二つ。

85 「員<sup>⋮</sup>」 貝<sup>⋮</sup>は“鼎（カナエ）”を簡単にした形。字式は口／貝。音読みのインは漢音、エンは漢・呉音、ウンと読む呉音もある。熟語に“全員”“欠員”“委員”“一員”“議員”“公務員”“客員”など。エンの読みとして“方員（ほうえん；四角と丸）”“員石（エンセキ；丸い石）”がある。ウンの読み方の使われ方は不明。

86 「損<sup>⋮</sup>」 手偏（1・2・3・4・5の点）と員（1・2・4・5の点）（口の部分を払い、貝は省略）で表す。手で鼎の脚を折る（神にさからう）の意味を持つ。字式は手偏十員。熟語に“損耗”がある。

(4) 毎日新聞社、有田記者からの質問を受ける。

## 見果てぬ夢を（十五）

山本優子



### 十四 出会い（承前）

「盲人の父」とも呼ばれた好本は一八七八年（明治一年）大阪の医師の家庭に生まれた。網膜色素変性症という先天性眼疾患による弱視者だったが、二十二歳で東京高等商業学校（現一橋大学）を卒業した後、英国に遊学。神学や盲人の教育や福祉を学んだ。若い時から聖書や内村鑑三の著書をむさぼり読み、方々の教会関係の集会に参加していた好本はキリスト教信仰に立ち、盲人界で働こうとする人たちを背後から支援し育てることに使命を見いだしていた。孝之進と出会ったころの好本はまだ駆け出したばかりだった。が、類を見ない国際的感覚、視野の広さを持ち、信仰に裏打ちされた英国紳士的な謙虚で穩健な人柄に孝之進は深い感動を受けた。好本の内に秘められた情熱に孝之進は自らの想いを重ね合わせ、旧知の友に出会ったような気がしたのであった。ちょうど好本が健康を害して帰国し、しばらくの療養の後、早稲田大学の英語講師として日本に滞在していた期間、一九〇六年（明治

三十九年）から二、三年の間の交わりであったが、お互いが分かち合ったものの大きさは計り知れない。孝之進と好本がざつくばらんに語り合っていた時、好本が言い出した。

「わたしは長年日本の盲人界をよくするための基盤になるような会を作りたいと祈ってきたんです」

孝之進の心は、はずんだ。

「好本さん、ぜひやりましょう。わたしはその実現のためにさっそく祈り始めますよ」

「左近允先生がそう言ってくださると、勇気百倍です。が、今の日本では盲人界への理解が全くありませんから、状況を見ながら、長期戦でいくしかないでしょうね」

孝之進は、思わず言った。

「こういう会は今すぐ必要です。そのうちにと言っているのは、いつまでたっても始まりませんよ。今日からでも具体的な構想を練って祈りましょう」

孝之進は言ってから、しまった！ と、思ったが、意外にも好本は、膝をのりだしてきた。

「左近允先生、感謝します。これは、主から出たこととです。わたしの内には、夢の構想があったのですが、実現に向けて後押しされてしまいましたよ」

好本は、「日本盲人会」結成を呼びかけ、發起人として賛同者が次々に名を連ねることになった。当時、朝鮮ソウルプレス英字新聞の主筆だった山縣五十雄（やまがた いそお）、東京盲学校校長の小西信八（こにし のぶはち）、京都盲啞院長鳥居嘉三郎（とりい かさぶろう）、岐阜訓盲院長森巻耳、日本訓盲点字翻案者である石川倉次、そして神戸訓盲院長左近允孝之進といった顔ぶれだった。当時の盲界の指導者たちだったわけだが、その多くはキリスト者だった。

この会を結成したことから、のちに好本の著書『日英の盲人』やヘレン・ケラーの『わが生涯』、内村鑑三の『後世への最大遺物』などが点字出版され、キリスト教的感化を盲界に残すことにもなった。

一九〇六年（明治三十九年）四月十七日夜、孝之進の尽力により、多聞教会を会場として、「訓盲院ならびに日本盲人界発起に関わる演説会」が持たれた。松井牧師が司会を担当し、孝之進がまず開会の辞を述べることになった。

準備を重ね、とうとう当日が来た。大勢の聴衆が集まっているのを感じる。全国組織の「日本盲人会」発足を、一般の人々の前でも宣言できる時が来たという万感迫る想いに孝之進の声は震えた。大阪盲啞院教頭

目黒文十郎（めぐろ ふみじゅうろう）、京都盲啞院教師谷口富次郎（たにぐち とみじろう）の講演に続き、好本が「英国の盲人」という題目で講演をした。七十名を超える聴衆の感動のうねりを、孝之進は全身で感じていた。ここまでやってこられたことへの感謝の想いと同時に、何とんでも自分に与えられた使命を全うしたいという強い願いに満たされた夜だった。その講演会は、特に日本のキリスト教界に盲人界への認識を広げる機会ともなった。

それを一つのきっかけに、好本は、かねてから深く共感を覚えていた孝之進の点字新聞、点字出版物普及への取り組みを、積極的に支援しようと努めるようになった。「あけぼの」はその後数年で廃刊に追い込まれたが、好本は後に毎日新聞五十周年の企画に毎日新聞社による点字新聞発行のアイデアを出した。そして、大正十一年に「点字毎日」発行を実現させた。中村京太郎（なかむら きょうたろう）を英国に留学させ、「点字毎日」の基盤を固めさせたことよって、この新聞は今日も発行され続けており、「点毎（てんまい）」という愛称で多くの人に親しまれている。好本と孝之進夫婦との出会いがなければ、「点字毎日」は始まっていなかったかもしれない。

# 漢文のペーシ

蜀相

杜甫

長 <sup>ヘニ</sup>	出 <sup>ダシテ</sup>	両	三	隔 <sup>ツレル</sup>	映 <sup>ズレル</sup>	錦	丞
使 <sup>ム</sup>	師 <sup>ラ</sup>	朝	顧	葉 <sup>ヲ</sup>	階 <sup>ニ</sup>	官	相 <sup>ノ</sup>
英	未 <sup>ダ</sup>	開	頻	黄 <sup>コウ</sup>	碧	城	祠
雄 <sup>ラシテ</sup>	捷 <sup>カタ</sup>	濟 <sup>ス</sup>	煩 <sup>ナリ</sup>	鸛 <sup>リ</sup>	草	外	堂
涙	身	老	天	空 <sup>シク</sup>	自 <sup>ラ</sup>	柏	何 <sup>レノ</sup>
滿 <sup>タ</sup>	先 <sup>ツ</sup>	臣 <sup>ノ</sup>	下 <sup>ノ</sup>	好	春	森	処 <sup>ニカ</sup>
襟 <sup>ラ</sup>	死 <sup>シ</sup>	心	計	音	色	森	尋 <sup>ネン</sup>

参照図書 『要説 漢詩』（日栄社）

蜀相

杜甫

丞相の祠堂何れの処にか尋ねん  
 錦官城外柏森森

階に映ずる碧草自ら春色

葉を隔つる黄鸛空しく好音

三顧頻煩なり天下の計

両朝開濟す老臣の心

師を出だして未だ捷たざるに身先ず死し

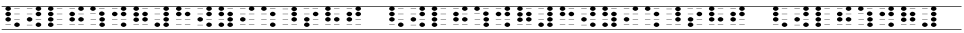
長えに英雄をして涙襟を満た使む



蜀相 || 諸葛亮 (字は孔明) のこと。蜀の丞相 (大臣) の地位にいた。  
 錦官城外 || 四川省の成都の郊外。孔明の廟がある。  
 黄鸛 || 鶯の一種。コウライウグイス。  
 三顧 || 三度も訪れて礼を尽くした。  
 開濟 || 国の基礎を作り固めること。

春の景色の中、孔明の廟を訪ねて感慨にふける。

漢滅亡後の三国時代、蜀の劉備(りゆうび)は、孔明に天下統一の計をたずね、三顧の礼を尽くして迎え入れる。孔明は、劉備とその子劉禪(りゆうぜん)の二代にわたって仕え、老臣となっても国づくりに心をくだいた。魏(ぎ)を撃つために出兵し、勝利を得る前に、陣中で病死した孔明の生涯は、後世の英雄たちを深く感動させ、涙を流させる。



蜀 相 しょくしょう

丞 相 ノ 祠 堂 何 レノ 処 ニカ 尋 ネン

錦 官 城 外 柏 森 森

映 ズル 階 ニ 碧 草 自 ラ 春 色

隔 ツル 葉 ヲ 黄 コウリ 空 シク

好 音

三 顧 頻 煩 ナリ 天 下 ノ 計

兩 朝 開 濟 ス 老 臣 ノ 心

出 ダシテ 師 ヲ ルニ 未 ダ 捷

か タ 身 先 ズ 死 シ

長 ヘニ 使 ム 英 雄 ヲ シテ 涙 満

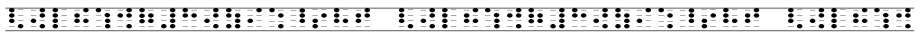
タ 襟 ヲ

～ 麗 + 鳥 り

再読文字 未ダ いまダ～ず  
ルニ未ダ いまダ～ざルニ



三国時代 (220～280年)  
後漢の末期になると、河北の魏に曹操、  
江南の呉に孫権、関中の劉備が、  
それぞれ国をたてて、魏・呉・蜀の三国  
が鼎立した。



# 漢点字講習用テキスト

## 初級編 第十四回

### 3 複合文字 (1)

#### 4. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (6)

※ 「口𠂔」を部首として含む文字。

(78) 唱𠂔𠂔 ショウ とな-える うた-う うた

「口𠂔偏」の右側に「日𠂔」を縦に二つ並べた形の文字です。右側の部首は、元は「口をそろえて言う」という意味を持った文字でしたが、現在では、別の意味に用いられています。そのために「口𠂔」を偏に付けて、その意味を表すようになりました。「となえる」と読んで、人に先んじてものを言う意味、「うたう」と読んで、節を付けてうたうことを表します。漢点字では、「𠂔 (口偏)」と「𠂔 (日)」で表されます。

\* 右側の「日𠂔」を縦に並べた文字「昌𠂔𠂔」、「ショウ、まさ」は、中級編でご紹介します。

「唱和」「唱歌」「唱詠」「合唱」「独唱」「輪唱」

(79) 單𠂔𠂔 タン ひとえ

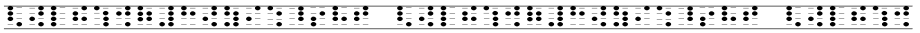
墨字では、カタカナの「ツ」の下に「田𠂔」・「十𠂔」と縦に並べた形の文字です。訓読みでは「ひとえ」ですが、副詞的に「たんに」という用いられ方が一般です。「ただ一つ」、「複雑でない」という意味で用いられます。この文字の旧字の「單」は、カタカナの「ツ」のところ、「口𠂔」を横に二つ並べた形になっています。漢点字では、この旧字を点文字符号にしています。すなわち「𠂔」と「𠂔」の符号で、「口𠂔」を二つ並べた形で表されます。

「単一」「単位」「単純」「単性」「単線」「簡単」「単衣物」

(80) 和𠂔𠂔 ワカ やわ-らぐ やわ-らげる なご-む なご-やか あ-える

「禾𠂔偏」の右側に「口𠂔」を置いた形の文字です。「禾𠂔」は、稲穂の実った形を表していて、豊かに穂を垂れた、丸く柔らかい状態を表す部首です。右側の「口𠂔」も、丸く定まった意味を表しています。「やわらぐ」、「なごむ」と読んで、角張らず、互いに許し合うという意味を表します。「あえる」と読んで、野菜や魚介を合わせた料理の意味にも





用いられます。また、「わ」と音読みすれば、我が国・日本を指す語にもなりますし、戦いを収めることも意味します。漢点字では、「𠃉 (禾偏)」と「𠃊 (口)」で表されます。

「和英辞典」「和解」「和合」「和平」「和睦」「平和」「共和国」「酔味噌和え」

・「合𠃉𠃊」と、それを部首として含む文字三つ。

(81) 合𠃉𠃊 ゴウ ガツ あ - う あ - わせる あつ - める あつ - まる

三角の屋根の形の下に横線、その下に「口𠃉」を置いた文字です。「口𠃉」は容器の形を表して、それに三角屋根と横線で表したフタを、ぴたりと閉じ合わせた形です。そこから、「あう」「あわせる」という意味が生じました。ものとものがぴたりと「あう」、気持ちや心が「あう」、と用いられます。また、ものを「あつめる」、人が「あつまる」という意味にも用いられます。さらに、容量の単位として、一升の十分の一の意味に、また、高い山を十等分して、その高さの目安としても用いられます。漢点字では、「𠃉」で三角の屋根の形を、「𠃊」で、「口𠃉」を表しています。

\* 「あう」と読む文字は沢山あります。前回出て来た「会𠃉𠃊」とこの「合𠃉𠃊」の用いられ方の違いにご注意下さい。大まかに、前者は「人にあう」、後者は、「ものがぴたりとあう」と用いられます。

「合格」「合理」「合同」「総合」「会合」「集合」「談合」「国際連合」「労働組合」

(82) 給𠃉𠃊 キュウ コウ たま - う たまわ - る たま - え た - す あた - える

「糸𠃉偏」の右側に「合𠃉𠃊」を置いた文字です。布地の欠けたところを直ぐに補うという意味を表しています。欠けたところを補う、必要なものを与える、目下の者へ与えるなどの意味があります。漢点字では、「𠃉 (糸偏)」と「𠃊 (合𠃉𠃊)」で表されます。

「給与」「給食」「給仕」「給餌」「支給」「補給」「俸給」

(83) 拾𠃉𠃊 シュウ ひろ - う

「手𠃉偏」の右側に「合𠃉𠃊」を置いた形の文字です。手で掻き集めることを表す文字で、そこから「ひろう」という意味が生じました。漢点字では、「𠃉 (手偏)」と「𠃊 (合𠃉𠃊)」で表されます。

「拾得物」「拾遺集」「落ち穂拾い」「拾い物」

## 「ご報告とご案内」

### 一 賛助会員のご芳名

昨・二〇〇八年度、横浜漢点字羽化の会並びに東京漢点字羽化の会に、賛助会費をご納入いただきました皆様のお名前を、ご報告させていただきます。



村田忠禧様、 雨宮絢子様、 河村美智子様  
武田幸太郎様、 遠藤幸裕様、 木原純子様  
高橋かず様、 政井宗夫様、 飯田みさ様  
佐川隆正様、 松村敏弘様

なお本誌「うか」の音訳版は、七十三号（本号）から、カセットテープからDAISYにメディアを移行致します。ご入金いただきました会費は、その費用に当てさせていただきます。

謹んで御礼申し上げます。

### 二 国際善隣協会での講演

前号でもご報告・ご案内申し上げましたように、横

浜国立大学の村田忠禧先生のご推薦で、社団法人・国際善隣協会にて、漢点字についてお話しさせていただきましたことになりました。日程等は、以下の通りです。

会場… 国際善隣会館五階

〒105-0004 東京都港区新橋 一・五・五

電話：03-3573-3051（代表）

URL： <http://www.kokusaizenrin.com/>

日時… 二〇〇九年四月二四日（金）

一三・三〇～一五・〇〇

演題… 漢点字と日中友好

\* 詳細はホームページをご覧ください。本会までご照会下さい。

### 三 音訳媒体の変更

本誌は、創刊から間もなく、横浜市社会福祉協議会・ボランティアセンターで活動しておられる音訳ボランティアの皆様のご協力を得て、視覚障害者向けに、カセットテープに録音された音訳版を、墨字版から一ヶ月遅れて発行して参りました。七十二号・十二年分を、滞ることなく、上質の音訳版として発行できまし

たことは、取りも直さず音訳ボランティアの皆様、  
並々ならぬご努力に負っております。感謝しても足り  
ることはございません。

ところで一般には、録音・録画のメディアは、アナ  
ログからデジタルへの移行を終了しました。通信・放  
送の分野も、デジタル化を終えようとしています。言  
い換えれば、視覚障害者の読書が音訳書を聴読するこ  
うの方法を採る限り、こういうトレンドを無視するこ  
とはできないと言えます。近い将来、カセットテープ  
というアナログのメディアそのものが、世の中から消  
えてしまおうという状況が迫って来ました。

視覚障害者向けのデジタル録音のメディアとして、  
現在スタンダードの位置づけが確定したと言ってよい  
のが、「DAISY」と呼ばれるシステムです。これ  
はCDに保存して読者のお手元に届けられますが、この  
CDには、録音内容がファイルにして収められていま  
す。従って録音内容をお手元に留めたいと希望される  
方は、そのファイルをお手持ちのパソコンのハードデ  
ィスクにコピーしていただければ保存できます。

本誌のDAISY版は、CDRWを使用してお届け  
致します。お聞き終わりになりましたら、お送りした

郵送袋の宛名カードを裏返して、ご返送下さい。

これまでディスク版としてEIBファイルを、フロ  
ッピーディスクに収めてお送りして参りましたが、こ  
れも同じCDRWに収録してお送り致します。

以上、ご意見等、お待ち申し上げます。

#### 四 漢点字講習会

横浜で行っております漢点字講習会は、今年・二〇  
〇九年度で、七年目に入ります。

例年の通り今年度も、横浜市健康福祉局、横浜市教  
育委員会、横浜市社会福祉協議会のご後援をいただい  
て実施致します。

この活動を通じて私どもは、触読文字である（漢点  
字）が、文字として遜色ないことを深く確信するよう  
になりました。多くの視覚障害者、教育関係者、視覚  
障害者をご支援いただいている皆様に、是非取り組ん  
でいただきたいと願っております。

今年度第一回講習会は、二〇〇九年五月五日一四  
〇〇～一六〇〇、横浜市社協八階、ボランティアセ  
ンター・ボランティアコーナーにて。

## 編集後記

「案内」ページにありますように、本誌「うか」の音訳版がテープからDAISY版に衣替えします。

本誌の編集担当者も、初代の宗助悦子さんから平野桃子さん、宇田川幸子さんを経て、私、木下に受け継がれ、号数も72号を数えるまでになりました。その12年間、1度も落とすことなく、隔月発行を継続してきました。私自身も、前担当者のやむを得ない事情から引き受けて、既に満3年を経過しました。確かに、この仕事は手間がかかり、神経も使うものですが、コンピュータとそれを扱うソフトの飛躍的な進歩によって、かなり快適に作業を進めることができています。

しかし、なんといつてもこの機関誌が続いているのは、岡田代表の並々ならぬ熱意と実践力によるところが大きいものです。その他にも長期間継続して執筆してくださっている山内さん始め多くの方々のご協力に感謝せずにはいられません。毎号新しく表紙絵を描いてくださる岡稲子さんは、第21号から欠かさず掲載させていただいています。本当にありがとうございます。

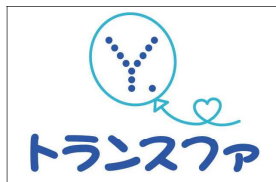
(木下 和久)

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada\_tr\_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は6月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。